ASEACCU 国際会議 2017 in タイに参加して

ASEACCU（東南・東アジアカトリック大学連盟）は、日本のほかに、韓国、台湾、タイ、フィリピン、インドネシア、カンボジア、オーストラリアの約80のカトリック大学によって構成され、毎年夏に加盟大学が国際会議を主催しています。会議は、講演やプレゼンテーションを交えながら、参加者が英語を共通語として意見を交わす機会となっています。

今年度の会議は、「インクルーシブ教育」（個別の教育的ニーズに対応しつつ、障がいのある人もない人も共に学ぶ教育の仕組みや環境）をメインテーマに、タイのバンコクにあるアサンプション大学で開催されました。

この会議にあわせて、加盟校の学生が主体となる「学生プログラム」も実施され、各国の若者が合宿や施設見学などを体験し、意見交換をする機会になっています。本学から参加した2名の学生による報告を紹介します。

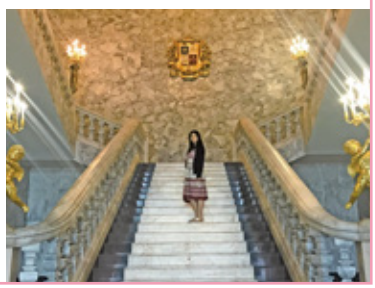
文学部
英語文化学科 3年
N.Mさん

■今回のASEACCU国際会議では大変貴重な経験をさせていただきました。“Inclusive Education”というテーマのもと多くのことを学び、他の学生の宗教観に触れることで、自分の考えを深めることが出来ました。

会議の中で、自分にとっての魂や頼りにしているものについて話し合いをした際に、日本人以外の学生は聖書や宗教と答える学生が多数でした。また直接宗教と答えていなくても、寛大さや互いを尊重するなどカトリック的な考えが多くみられました。彼らにとって宗教とはただ漠然と信じるものではなく、自分の生活、人生になくてはならないものなのです。宗教について考え、ミサなどに直接足を運んでみて、何か頼りにするもの、信じるものがあるのは素敵なことだと感じました。

また、障がい者施設の訪問や盲目の方の講演会、様々なワークショップを通して、障がい者＝かわいそうというステレオタイプが彼らに対して失礼なことであると気付かされました。健常者と障がい者を同じ条件や環境で学ばせることが良いことなのではなく、同じ世界が見られるように一人一人にあった支援をすることが彼らのためになるのではないか。自分たちのエゴではなく、本当に彼らが望んでいることは何なのか考えていきたいです。

今回の会議で様々な国や地域の学生、現地の方と交流して、互いを知ろうとする気持ちさえあれば、宗教、民族、人種、障がいの有無などの壁を乗り越えて仲良くできると肌で感じることが出来ました。違いを尊重し、理解しようとする気持ちを大切にして他者との関わりを大事にしていこうと思います。



文学部
文化総合学科 3年
I.Mさん

■今年度はインクルーシブ教育が大きなテーマとして挙げられ、5日間にわたって議論や施設への訪問がなされた。会議参加前、日本社会全体の障がい者への配慮は多岐にわたっており、この包括的な環境づくりへの姿勢や態度は大いに誇るべき点であると考えていた。今会議においても、当初の現状分析からは各国ともに障がいを持つ人々を認め、支援することで社会全体の和を保つことを意識しているようだった。ただし日本の場合、“あくまで表層的であるのではないか”という意見が多くの学生から聞かれ、研究やディスカッションを進めるにつれても深層的には無意識に互いを区別し、壁を作ってしまっているのではないかという疑問が提起された。さらに“健常者”“障がい者”という無意識なカテゴリー化が“インスピレーションポルノ”※を代表としたメディア媒体を通じて「理想と現実との乖離」に拍車をかけているのではないかということも懸念された。

そこで、打開策として私たちが考えるのは、第一段階に互いを知り、理解することで認め合うこと(understand & accept)。第二段階にそれをもって互いを尊重し賞賛しあうこと(respect)、である。この段階を意識的に踏んでいくことが真の包括的な社会をつくりだす近道なのではないだろうか。

今回は、目的としていた国や文化の異なる学生からの意見を吸収し、知見を広げるということができた。今後のゼミ活動や就職活動の中で積極的にアウトプットしていきたいと思っている。

※インスピレーション・ポルノ（感動ポルノ）：障がい者の生きる姿を、人々に感動をもたらすモノとして扱い、一方的にメディアなどで取り上げることを批判する意味で使われる。